

世界に羽ばたけ！ 米山学友①

日中が共に歩む 21 世紀に

日中友好の懸け橋になりたい

「出向して1年間、「日中文化・スポーツ交流年」の仕事をやってみないか?」。徐海波さんが上司からこうもちかけられたのは、入社5年目の冬でした。

「日中文化・スポーツ交流年」とは2007年、日中国交正常化35周年を記念し、青少年の交流を中心に政府主導で計画・実施された、300以上の交流事業のことです。当時、御手洗富士夫経団連会長が日本側実行委員長となり、実行委員会を発足。一連の事業の運営事務局を立ち上げるために、協力企業から人材が集められることになったのです。

東京理科大学大学院修士課程を留学生初の首席で卒業した徐さんは、2002年4月1日、松下電器産業(現・パナソニック)(株)の入社式でも、外国人として初めての新社員代表となり、社長への答辞を述べました。徐さんは、創業者・松下幸之助氏が、かつて中国の鄧小平氏の訪問をきっかけに、採算を度外視し

て中国の近代化のために協力する約束をした逸話を披露し、「自分も日本と中国との懸け橋になりたい」と、決意を語っていました。その言葉を胸に仕事に励んでいた徐さんにとって、両国民がかつてない規模で交流する事業の一端を担うことは、またとないチャンスだったのです。上司からの打診に、「ぜひ、やらせてください」。徐さんは即答しました。

グランドフィナーレ成功の裏に

「日中文化・スポーツ交流年」実行委員会事務局次長として、多忙な1年間が始まりました。日本側で唯一

の中国人で、日中双方の事情を知る徐さんの仕事は、中国政府との折衝窓口。まさに懸け橋となる役割でした。

特に苦労したのは、交流年を締めくくったグランドフィナーレ・コンサートです。日中友好を世界にアピールするために選ばれた会場は、なんと「人民大会堂」。日本でいえば国会議事堂にあたり、中国側からは当然ながら「あり得ない」と一蹴されました。それでも現地へ何度も足を運び、熱意を伝え、外務省や日中の大使館を巻き込みながら粘り強く交渉した結果、誰もが不可能と思っていた同会場での開催が、実現したのです。

とはいえ、当日もハプニングの連続。御手洗実行委員



日中文化・スポーツ交流年を締めくくったグランドフィナーレ・コンサート

長の駐車許可が下りていないと気づいたときは警察へ駆けつけ、交流年の趣旨を一から説明し、日本の賓客をもてなす重要性を説き、事なきを得ました。「こういう交渉は、電話や人任せではだめ」。現場主義を貫く徐さんは言います。

苦学生としての孤独な日々から

順風満帆に見える徐さんにも、苦しい時期がありました。「留学中の費用はすべて自分で何とかする」と両親に約束して来日したものの、午前中は日本語学校で勉強、午後からは印刷工場でアルバイト、疲れ切って帰宅した後は深夜まで大学への受験勉強、食費は1日300円以下。初めて味わった貧しく、孤独な日々でした。

その後、東京理科大学に合格しましたが、母国では当たり前だった先輩への友達口調が不興を買い、孤立。日本にいても、日本の習慣を知る機会も余裕もなく、それまでの「常識」が通用しないことにショックを受けました。

自分の文化、自分の常識をふりかざしても何の解決に



よねやまだより

今月号からは、母国と日本の懸け橋として活躍する米山学友を、シリーズで紹介していきます。第1回は、大学院を首席で卒業、日本の一流企業に入社し、将来を嘱望される徐海波さん。昨年、日中両国政府による「日中文化・スポーツ交流年」の推進メンバーとして、日中友好の懸け橋となりました。そんな彼が留学生時代に味わった疎外感、違いを受け入れられない自分。やがてたどり着いた他者への見方とは――。

もならず、成長もできない、そう気づいた徐さんは、日本を知るために新聞の社説を熟読し、先入観を捨てて仲間と語り合い、信頼関係を築く努力を始めました。

米山記念奨学生となったのは修士課程での2年間。世話クラブは大宮中央ロータリークラブ。ここでも徐さんは、例会に出席するたびに席を替えて会員と語り合い、親睦を深めていきました。カウンセラーを務めた林正憲会員とは、今でも家族ぐるみの付き合いをしています。

「学生時代にロータリーの皆さんと接したことで、社会常識や人への思いやり、助け合いの大切さを自然と身につけることができました」という徐さん。現在、海外営業部門に所属し、1か月の半分は中国各地へ出張する日々を送っています。部署のチームリーダー・森澤基和氏は、「彼が、こちらの状況を中国のお客さまへきめ細かく情報発信しフォローをしてくれるので、コミュニケーションが非常に良くなった。日本の工場サイドからも、中国のお客さまの考え方や状況が理解しやすくなったと言われます」と話しています。

共に歩んでいく世紀に

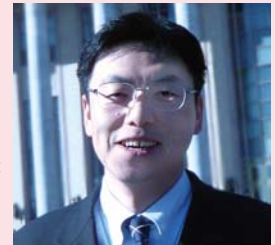
鄧小平氏の同社訪問から30周年にあたる今年5月、胡錦濤国家主席が同社を訪問した際には、徐さんが再び社員代表として壇上に立つ大任を担いました。

最近では食品汚染問題もあり、「中国を見る目が厳しくなっている」と、徐さんは感じています。

プロフィール

ジョー カイハ
徐海波さん

(2000-02年/大宮中央RC)
1971年生まれ。中国吉林省長春市出身。東京理科大学大学院修士課程修了。02年、パナソニック(株)入社。07年3月から1年間「日中文化・スポーツ交流年」実行委員会事務局へ出向。現在はインダストリー営業本部で中国向け開発営業を担当。



しかし、「日中文化・スポーツ交流年の事業を通して、数え切れないほど友情が生まれたことも事実です。交流年の仕事、これまでの人生から実感したのは、人も国も、密になればなるほど問題が起きても解決できるということ。互いに理解し、信頼関係ができれば、バランスのとれた見方ができるようになります。私は、この21世紀を日中が対立するのではなく、共に歩んでいく世紀にしたいと思うのです」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

ミャンマーと中国四川省の被災者を支援 ― 第2780地区米山学友会 ―

第2780地区(神奈川県)米山学友会では、地区と連携して地域奉仕・国際奉仕に積極的に取り組んでいます。今回、未曾有の被害となったミャンマーのサイクロンと四川省大地震の被災者支援のため、5月に現役奨学生の世話クラブの一つである茅ヶ崎中央ロータリークラブと募金活動を行い、ロータリアンや学友、奨学生から約60万円の義援金を集めました。ミャンマーにはすでに送金し、四川省へは現地NPOを通じ、特に支援の必要な子ども1~2人を、5~10年にわたり奨学援助する計画です。「たとえ少額でも、被災者に少しでも夢と希望を与えられたらと思います。われわれにとって、これは新たな奉仕への第一歩となるでしょう」と同学友会長の劉坤^{リュウゴン}さんは語っています。



四川地震の被災児のため募金活動